

確認強迫傾向におけるリアリティモニタリングの影響

大谷 貴重^{*}・岩永 誠^{**}・生和 秀敏^{**}

広島大学大学院生物圏科学研究科^{*}
広島大学総合科学部^{**}

Affect of reality monitoring in obsessive-compulsive checker

Takashige OTANI^{*}, Makoto IWANAGA^{**} and Hidetoshi SEIWA^{**}

Graduate School of Biosphere Science, Hiroshima University^{},
Faculty of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University,^{**}*

Abstract: Reality monitoring has been considered as a cause of a check compulsion, which is one dominant symptom in obsessive-compulsive disorder (OCD). However, the previous studies could not confirm confusions of reality monitoring in OCD checkers but found decrements of the confidence for memorizing (McNally & Kohlbeck, 1993; Constant, For, Franklin & Mathes, 1995). Since the previous studies had many problems concerning to the task and the hedonic value of stimuli, they could not discuss confusions of reality monitoring of OCD checkers sufficiently. The present study aimed to examine the reality monitoring of OCD checkers by using an incidental learning task, which hedonic values of stimuli were experimentally controlled (neutral, negative and positive). As results, confusions of the reality monitoring of OCD were found in false alarms of neutral and positive words. However, any decrement of the confidence for memorizing was not found. These results were inconsistent with the finding of the previous studies.

Keywords: reality monitoring, obsessive-compulsive disorder, checker, hedonic value, incidental learning

【序論】

家を出た後で、鍵をかけたかどうかや、電気を消したかどうか分らなくなり、確認をするために戻ることがある。このような確認をすることは誰にでも見られる現象であるが、確認の頻度がひどくなると日常生活に支障をきたすことがある。

確認を何度もしてしまう障害は確認強迫と呼ばれ、強迫性障害の一つとされている。強迫性障害の症状は、主に強迫観念と強迫行為の2つからなる。強迫観念とは、意に反して侵入的に繰り返し浮かんでくる持続的な思考やイメージ、衝動であり、強迫行為はその行為が不合理で過剰だと分かっているのにやめたいと思っていながら、どうしてもやめられずに続けてしまうというものである (deSilva & Rachman, 1998)。強迫性障害では、強迫観念が引き金となって不安や苦痛が生じ、確認強迫を引き起こす原因となっている。強迫行為を行なうことでその不安や苦痛を低減することか

ら、強迫行為は中和反応とも呼ばれている。すなわち確認強迫では、鍵を閉めていないののではないかと、泥棒に入られるのではないかとという強迫観念が生起することで不安が高まり、その不安を低減・中和するために確認強迫行為が行なわれる。

確認強迫行為を行なう原因の一つに記憶が関与していると考えられている。特に、確認強迫者のリアリティモニタリングの混乱が議論されてきた(McNally & Kohlbeck, 1993; Constans, For, Franklin & Mathews, 1995)。リアリティモニタリングとは、実際に行なった行動や知覚などによって生じる外的な出来事の記憶(外的記憶)と、想像や思考によって生じる内的な出来事の記憶(内的記憶)とを区別することである(Cohen, 1989)。リアリティモニタリング研究では、以下のようなリアリティモニタリング課題を用いて検討が行なわれてきた。最初に刺激や動作などを自分が見たり行なったりする条件(知覚項目)と、自分の頭の中でイメージしたり考えたりする条件(想像項目)で学習させる。その後、学習した知覚項目と想像項目に、学習されていない項目(新規項目)を加えて呈示し、学習した際に「見た(知覚)」ものであったか、「考えた(想像)」ものであったか、あるいは学習した際には「無かった(新規)」ものかを判断させるというものである。この判断成績を比較することで、リアリティモニタリングができていのかどうかを調べることができる。

McNally and Kohlbeck (1993)は、線画と単語を刺激としたリアリティモニタリング課題を用いて、確認強迫者と健常者で判断成績を比較した。知覚項目は刺激を見る条件と刺激をペンでなぞる条件であり、想像項目は呈示された単語や線画を自分がなぞるところを想像する条件であった。実験の結果、確認強迫者と健常者において、判断成績に違いは見られずリアリティモニタリングに違いは認められなかったが、確認強迫者は判断に対する自信(確信度)の低下が認められた。

一方、Constans et al.(1995)は、確認強迫者は不安な状況で判断がしにくくなると考え、不安を喚起する動作(例、ドアを閉める、ろうそくを消す)と中性的な動作(例、本を開く)を刺激として用いて、確認強迫者と健常者のリアリティモニタリングについて検討した。知覚項目は動作を実際に行なわせる条件であり、想像項目は動作を行なうところを想像させる条件であった。実験の結果、判断の成績に確認強迫者と健常者で違いは見られず、不安を喚起する動作では確認強迫者は健常者より判断成績が良くなっていた。

このように、確認強迫者におけるリアリティモニタリングについて検討した先行研究において、不安を喚起する刺激を用いた場合でもリアリティモニタリングの混乱は認められないことから、確認強迫者で問題なのは記憶に対する自信の低下にあると考えられてきた。しかし、先行研究では以下に示すような実験手続き上の問題があり、確認強迫者と健常者のリアリティモニタリングの成績に差が認められなかった可能性が考えられる。

リアリティモニタリング研究では、覚える際の影響をなくすために偶発学習課題を用いてきた(Johnson, Raye, Foley, & Foley, 1981; Hoffman, 1997)。しかしMcNally and Kohlbeck (1993)の実験では、刺激呈示時に後でどれくらい刺激を覚えているかのテストを行なうと教示しており、偶発学習課題ではなく記憶課題となっていた。確認強迫者は、悪い結果に対する自分の責任を感じやすく、そのような事態を防ごうと思いやすいといわれていることから(杉浦, 2002)、悪い結果をもたらさないよう強く動機づけられ、課題をよく覚えようとしたために判断成績が高くなっていた可能性が考えられる。

刺激の持つ感情価による問題も考えられる。Constans et al. (1995)の実験では、不安喚起動作の判断において確認強迫者は健常者よりも成績が良くなっていた。しかし、健常者では情動を喚起する内容では、判断成績が悪くなると言われていることから(Johnson, Nolde, & De Leonadis, 1996)、不安を喚起した刺激においては、確認強迫者では成績が良くなり健常者では成績が悪くなると考えら

れる。すなわち、実際には確認強迫者の判断成績が悪いとしても、刺激の感情価が判断成績に及ぼす影響が異なる可能性があるため、不安を喚起した刺激において確認強迫者の判断成績が良くなることで、判断成績の低下が認められなかったと考えられる。

以上示してきたように、課題や刺激の感情価により確認強迫者の判断成績が良くなっていたため、先行研究では確認強迫者と健常者のリアリティモニタリングに違いが認められなかった可能性がある。本研究では、課題による確認強迫者と健常者の動機づけ水準の違いをなくすために、記憶課題ではなく偶発学習課題を用いることにした。また刺激の感情価を統制するため、中性語、ポジティブ語、ネガティブ語を刺激として用いることにし、情動を引き起こさない中性語の判断成績から、確認強迫者と健常者におけるリアリティモニタリングの違いについて検討することにした。先行研究から、中性語では健常者で判断成績がよくなると考えられ、ネガティブ語では確認強迫者で判断成績がよくなると考えられる。またポジティブ語を用いることで、ポジティブな刺激が確認強迫者と健常者の判断成績に及ぼす影響について検討する。

【目的】

刺激の感情価を統制した偶発学習課題を用いて、確認強迫傾向高群と低群のリアリティモニタリングの判断成績に及ぼす刺激の感情価の効果について検討することを本実験の目的とした。

【仮説】

以下の3つの仮説を立てた。

1. 中性語において確認強迫傾向高群は低群より判断成績が悪い
2. ネガティブ語において確認強迫傾向高群は低群より判断成績が良い
3. 確認強迫傾向高群は低群より確信度が低い

【方法】

実験参加者

心理学の授業を受講する大学生389名(平均年齢19.5歳, $SD = 0.98$; 男性192名, 女性195名, 不明4)に、強迫傾向尺度(井出・細羽・西村・生和, 1995)とSTAI-Tを実施した。強迫傾向尺度の確認強迫尺度の得点を確認強迫得点として用い、全体の上位30%, 下位30%に該当する者のうち、実験参加の承諾の得られた確認強迫傾向高群21名(確認強迫得点 $M=29.0$ 点, $SD = 3.00$, 特性不安得点 $M=47.9$, $SD = 3.75$, 平均年齢19.0歳, $SD = 0.59$; 男性8名, 女性13名), 確認強迫傾向低群22名(確認強迫得点: $M=11.2$, $SD=2.81$, 特性不安得点: $M=46.9$, $SD=4.00$; 平均年齢19.0歳, $SD = 1.04$; 男性9名, 女性13名)を実験参加者として用いた。操作チェックのため、確認強迫得点および特性不安得点について、確認強迫傾向(高/低)によるt検定を行なった。その結果、確認強迫得点では確認強迫傾向高群が低群より有意に高い値を示した($t(41)=20.01$, $p<.001$)が、特性不安得点では高群と低群で有意差は認められなかった($t(41)=1.20$, ns)。このことから、確認強迫傾向高群と低群では確認強迫得点にのみ差があることが示された。

実験デザイン

確認強迫傾向(高/低;被験者間)×項目(知覚/想像/新規;被験者内)×感情価(中性/ネガティブ/ポジティブ;被験者内)の3要因混合デザインであった。

実験装置

実験は約2.5m×1.8m(室温約22)の実験室内で行なった。実験参加者は実験室中央の刺激呈示用モニターから約1m離れた椅子に座った。

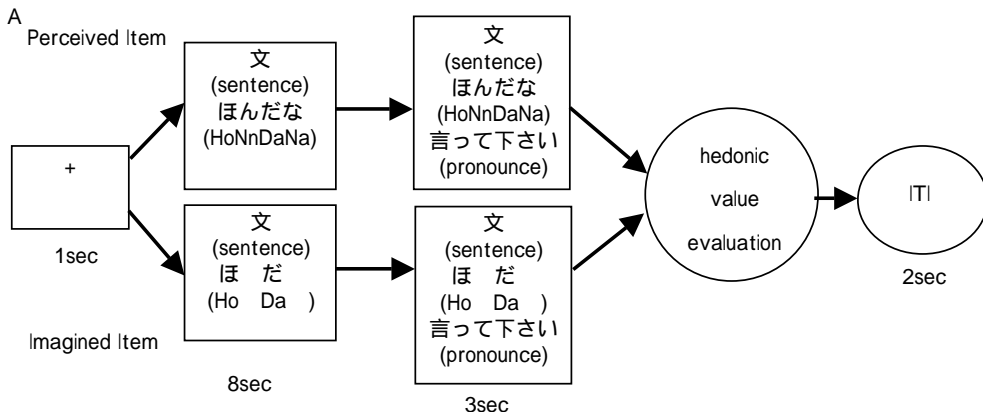
刺激は、パーソナルコンピュータ(Gateway2000 P5-200)を用いて、実験室内のテレビモニター(NANA O EIZO E57T)に呈示した。実験参加者の反応測定は、Microsoft製マウスと、Dell製キーボード(RT7D00)で行なった。実験中、実験参加者が作業を確実にこなしているかどうかの確認は、Watec製カラーCCDカメラ(WAT-230A)と、日立製作所製カラーテレビ(C6-A10)を用いて行なった。

刺激材料

刺激には単語と、その単語の説明をする文を用いた(例、単語:さつじん、文:人を殺すこと)。使用した単語は、225単語を大学生15人が評価した予備調査の結果をもとに選定した。単語が持つ感情価(5段階、1;非常にネガティブ、3;どちらでもない、5;非常にポジティブ)と使用頻度(5段階、1;全く使われない、5;よく使われる)を評価させた。刺激には使用頻度が3.3~4.9の単語を用い、そのうち中性語(感情価;2.8~3.4)、ポジティブ語(感情価;4.1~4.8)、ネガティブ語(感情価;1.1~1.9)をそれぞれ30語選出した。知覚項目、想像項目および新規項目は、それぞれ中性語、ポジティブ語、ネガティブ語を各10語ずつ用い、計30語になるようにした。選択された単語を説明する文を作成し、文から単語を考える際の難易度(5段階、1;非常に簡単、5;非常に難しい)を調査し、難易度が1.2~2.0であったものを用いた。

課題

文と単語を呈示し、それらを見る条件(知覚項目)と、文と一部を空白にした単語を呈示し、文をヒントに単語を考える条件(想像項目)を設定し、それぞれを偶発学習させた。単語はひらがなで呈示し、知覚項目では単語と文をそのまま呈示した。想像項目で用いられる単語では、4文字、5文字の単語は2文字を空白にし、6文字の単語では3文字を空白にして呈示するようにした(例、さつじん さ じ , しゅくふく しゅ ぶ , ちゅうしょく ち し く)。



B



Figure1. Procedure of task

A: The presentation method of a learning task. HoNnDaNa:booksheif.

B: The presentation method of a recognition task. This word (HoNnDaNa) was thought, presented(seen) or not presented(no) in the learning task.

(1)学習課題 Figure 1-A に刺激の呈示方法を示した。知覚項目、想像項目を各 30 語、計 60 語をランダムにして呈示した。

知覚項目：十字（+）のマークを 1 秒間呈示し、そこに視点を置くようにさせた。その後、十字のマークのあった個所に文を呈示し、文の下の位置に単語を呈示した。文と単語を 8 秒間呈示し、文だけを声に出して読むようにさせた。そして「言ってください」と 3 秒間呈示し、呈示されている単語を声に出して読むようにさせた。

想像項目：十字（+）のマークを 1 秒間呈示し、そこに視点を置くようにさせた。その後、文と一部を空白にした単語を知覚項目の場合と同様の位置に 8 秒間呈示し、呈示されたら文を声に出して読み、さらに文をヒントにして単語を考えるようにさせた。そして「言ってください」と 3 秒間呈示し、考えた単語を声に出して読むようにさせた。

知覚項目、想像項目ともに、単語を声に出して読んだ後、単語の印象を 5 段階（1；非常にネガティブ、3；どちらでもない、5；非常にポジティブ）で評価させた。評価が終わると次の試行に移るようにした。評価に時間制限はなく、刺激間隔は 2 秒とした。また、初頭効果をなくすため最初に 4 試行（知覚項目 2 試行、想像項目 2 試行）、新近性効果をなくすため最後に 2 試行（知覚項目 1 試行、想像項目 1 試行）をフィラー試行として行ない、データには用いなかった。

(2)挿入課題 短期記憶の影響をなくすために挿入課題を行なった。『私が引きこもった理由』（田辺、2000）の中から、『多分すごく必要な時間だと思う。それがわかるのは出てきてから』の章を 13 分間読み、その後 2 分休憩した後、印象に残った箇所を 3 分間書くようにさせた。印象に残った箇所を書く際に、元の文章を見ないで書くようにさせた。書き終わった後、2 分間休憩してから次の課題へ移るようにした。

(3)再認課題 知覚項目、想像項目および新規項目を各 30 語、計 90 語をランダムにして Figure 1-B に示した順で呈示した。

十字（+）のマークを 1 秒間呈示し、そこに視点を置くようにした。その後単語を呈示し、その単語が、学習課題で「見た」単語か「考えた」単語か、あるいは学習課題には「無かった」単語のどれであったかを判断させた。判断をした後、その判断に対してどれぐらい自信があるかを 6 段階（1；自信が無い、6；自信がある）で評価させた。判断の制限時間は 10 秒とし、制限時間を超えたら自信の評価の画面に変わるようにし、その際の自信の評価は 1 とした。確信度の評定に制限時間は設定しなかった。

手続き

実験室に入室後、実験参加者に対して『本実験は単語や文章の印象について調べる実験です』と教示し、学習課題の練習試行を2試行行なった。課題のやり方を、実験参加者が理解したのを確認してから偶発学習課題を行なった。学習課題終了後、挿入課題、再認課題の順で行なった。再認課題の際に制限時間が10秒であると教示し、なるべく制限時間を超えないようにするよう教示した。

指標

スクリーニングに用いた尺度は以下の2つである。

- (1) 強迫傾向尺度（井出他，1995） 確認強迫症状を測定するために、確認強迫尺度を用いた。
- (2) STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORY 日本語版（清水・今栄，1981） 本実験では、確認強迫傾向高群と低群で特性不安に差が無いようにするために特性不安を測定した。

Table1 The classification of response.

response	Item		
	Perception	Image	New
Perceived	Correct recognitio	False recognition	False alarm
Imagined	False recognition	Correct recognition	False alarm
New	Miss	Miss	Correct rejection

従属変数として用いる変数は、判断成績と自信である。知覚項目、想像項目、新規項目に対する反応の分類をTable 1に表す。正再認は知覚項目に対して「見た」、想像項目に対して「考えた」というように、覚えており正しく判断したものを表す。誤再認は知覚項目に対して「考えた」、想像項目に対して「見た」というように覚えていたが誤って判断したものである。正棄却は、新規項目に対して「無かった」と正しく判断できたことを表す。ミスは知覚項目、想像項目に対して「無かった」と判断することである。フォールスアラームは、新規項目に対して「見た」、「考えた」と誤って判断したことである。

(1) 正再認率

覚えていたものに対して「見た」か「考えた」かの判断ができていようかどうかの指標として正再認の値を、正再認と誤再認を合計した値で割った正再認率を用いた。

$$\text{正再認率} = \text{正再認数} \div (\text{正再認数} + \text{誤再認数})$$

(2) 混乱指標

フォールスアラームの値を割合にしたものもリアリティモニタリングの混乱の指標とした。値にはフォールスアラームの数を新規項目の項目数で割った値を用いた。

$$\text{フォールスアラーム率} = \text{フォールスアラーム数} \div \text{新規項目の数}$$

(3) ミス

学習した項目をどれぐらい覚えていたかを検討するため、ミスの値を割合にしたものを用いた。知覚、想像項目におけるミスの数をそれぞれの項目数で割ったものを値として用いた。

$$\text{ミス率} = \text{ミスの数} \div \text{項目の数}$$

(4) 感情語の影響

感情語の成績には、感情語とリアリティモニタリングの両方の影響があり、中性語の成績にはリアリティモニタリングのみの影響があると考えられる。そのため、感情語の影響を見る指標として、感情語の成績から中性語の成績を引いたものを用いた。

$$\text{感情語の影響} = \text{感情語の成績} - \text{中性語の成績}$$

(5)確信度

判断に対する自信の指標として正再認率における確信度の値を用いた。

分析方法

高群と低群における判断成績の違いについて検討するため、中性語の値を用いて正再認率、フォールスアラーム率、ミス率について分析を行い、感情語による成績への影響の違いについて検討するため、ネガティブ語 - 中性語、ポジティブ語 - 中性語の値を用いて正再認率、フォールスアラーム率、ミス率について分析を行なった。正再認率については反応時間を共変量とした確認強迫傾向(高/低) × 項目(知覚/想像)の2要因分散分析を行なった。フォールスアラーム率とミス率については、反応時間の値がない場合があり反応時間を共変量に用いることができないため、確認強迫傾向(高/低) × 項目(知覚/想像)の2要因分散分析を行なった。

高群と低群における判断に対する自信の違いについて検討するため、確信度において確認強迫傾向(高/低) × 項目(知覚/想像) × 感情価(中性/ポジティブ/ネガティブ)の3要因の分散分析を行なった。

【結果】

著しく判断成績が低い被験者を分析から除くため、正再認率が ± 2SD 以上、反応時間が平均より ± 2.5SD 以上の実験参加者を分析から除いた。分析には、確認強迫傾向高群 17 名(確認強迫得点 M=29.0点, SD=3.20; 特性不安得点 M=48.3, SD=3.94)、低群 15 名(確認強迫得点 M=11.1点, SD=3.01; 特性不安得点 M=47.2, SD=4.43)を用いた。内省報告から全員が記憶課題とは思っておらず、偶発学習されていた。

中性語における判断成績

Figure 2 に、中性語における各群の反応時間を共変量とした正再認率、フォールスアラーム率、およびミス率の値を示す。正再認率の図は、値が高いほど正確な判断が多かったことを示しており、フォールスアラーム率およびミス率の図は値が高いほど誤った判断が多かったことを示している。正再認率において高群は知覚項目で成績が高く正しい判断が多かったが、フォールスアラーム率では高群は知覚項目で判断成績が高く誤った判断が多かった。また、ミス率においては両群とも知覚項目で判断成績が高く誤った判断が多くなっていった。

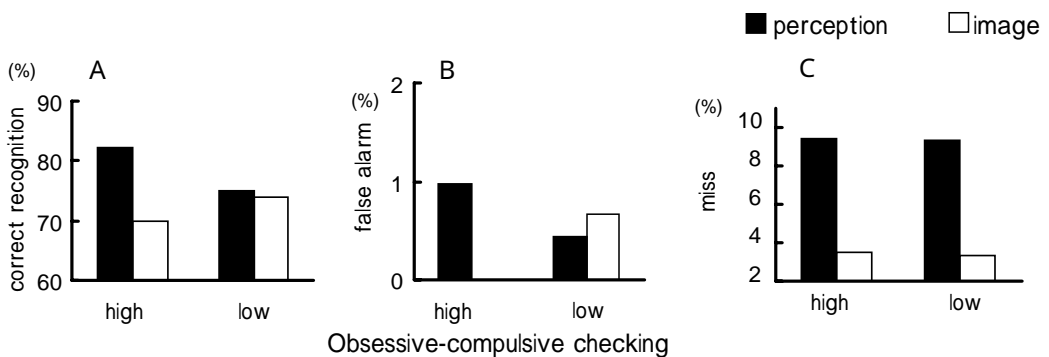


Figure 2 Correct recognition, false alarm, and miss in neutral word
 A: The rate of correct recognition. B: The rate of false alarm. C: The rate of miss.

分散分析を行なった結果、正再認率において、確認強迫傾向の主効果 ($F(1,64)=.14$, ns), 及び交互作用 ($F(1,64)=1.84$, ns) は認められず、中性語において正再認率に差は認められなかった。フォールスアラーム率において、確認強迫傾向と項目の交互作用の傾向差があり ($F(1,30)=2.97$, $p<.10$), 下位検定の結果、強迫傾向高群において、知覚項目で想像項目よりフォールスアラーム率が多い傾向が認められた ($F(1,30)=3.95$, $p<.10$)。ミス率において、確認強迫傾向の主効果 ($F(1,30)=1.51$, ns), 及び交互作用は認められなかった ($F(1,30)=1.88$, ns)。中性語において、フォールスアラーム率で確認強迫傾向の影響が見られた。強迫傾向高群は、新規項目を「考えた」と誤って判断するより、「見た」と誤って判断することが多かった。

ネガティブ語が成績へ及ぼす影響

Figure 3にネガティブ語 - 中性語における、反応時間を共変量とした正再認率、フォールスアラーム率、およびミス率の値を示す。正再認率の図は、値が正であればネガティブ語において中性語より正確な判断が多いことを示しており、値が負であれば中性語においてネガティブ語より正確な判断が多いことを示している。フォールスアラーム率とミス率は、値が正であればネガティブ語において中性語より誤った判断が多く、値が負であれば中性語において、ネガティブ語より誤った判断が多いことを示している。どの図も差分値が大きいほど、ネガティブ語の影響が大きいことを示している。正再認率、フォールスアラーム率において、高群と低群であまり差は認められず、ミス率において高群は低群と比べ高い値を示していた。

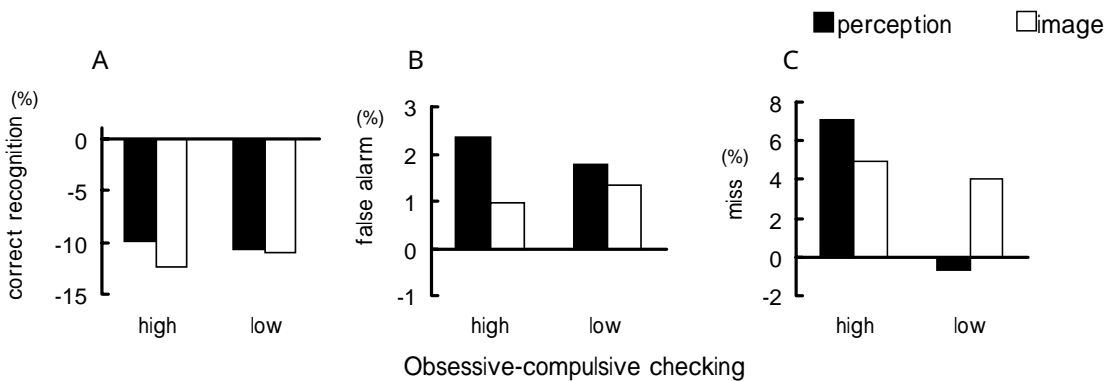


Figure 3 Effect of negative words on the percents of correct recognition, false alarm, and miss
A: The rate of correct recognition. B: The rate of false alarm. C: The rate of miss.

分散分析を行なった結果、正再認率において確認強迫傾向の主効果 ($F(1,64)=.00$, ns), 及び確認強迫傾向と項目の交互作用 ($F(1,64)=.03$, ns) は認められなかった。フォールスアラーム率において確認強迫傾向の主効果 ($F(1,30)=.05$, ns), 及び交互作用 ($F(1,30)=.40$, ns) は認められなかった。またミス率において、確認強迫傾向の主効果 ($F(1,30)=1.54$, ns), および交互作用 ($F(1,30)=1.48$, ns) は認められなかった。正再認率、フォールスアラーム率、ミス率において、ネガティブ語が成績に及ぼす影響について強迫傾向高群と低群で差は見られず、ネガティブ語がリアリティモニタリングに及ぼす影響に強迫傾向高群と低群で違いは認められなかった。

ポジティブ語が成績に及ぼす影響

Figure 4に、ポジティブ語 - 中性語における反応時間を共変量とした正再認率、フォールスアラーム率、およびミス率の値を示す。正再認率の図は、値が正であればポジティブ語において中性語より正確な判断が多いことを示しており、値が負であれば中性語においてネガティブ語より正確な判断が多いことを示している。フォールスアラーム率とミス率は、値が正であればポジティブ語において中性語より誤った判断が多く、値が負であれば中性語においてポジティブ語より誤った判断が多いことを示している。どの図も差分値が大きいほど、ポジティブ語の影響が大きいことを示している。正再認率において高群は知覚項目で低い値を示しており、フォールスアラーム率では高群は知覚項目において高い値を示している。また、ミス率において高群は知覚項目において低群より高い値を示した。

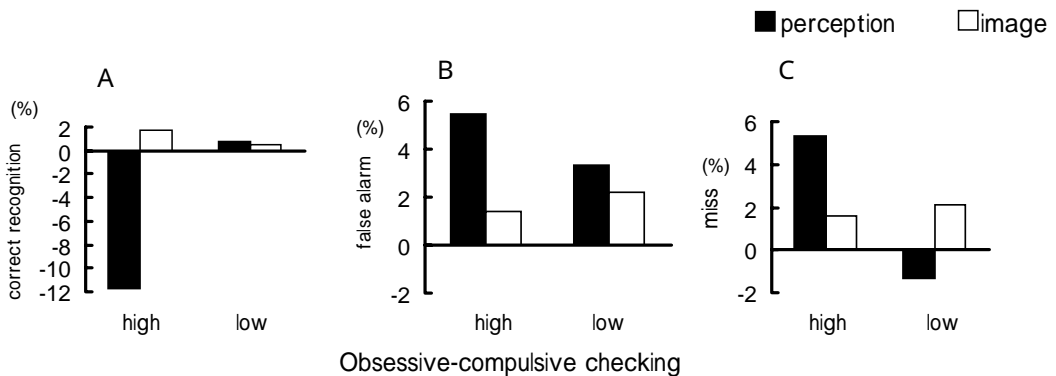


Figure 4 Effect of positive words on the percents of correct recognition, false alarm, and miss
A: The rate of correct recognition. B: The rate of false alarm. C: The rate of miss.

分散分析を行なった結果、正再認率において確認強迫傾向の主効果 ($F(1,64)=1.34, ns$)、および交互作用 ($F(1,64)=2.07, ns$) は認められなかった。フォールスアラーム率において、確認強迫傾向と項目の交互作用傾向が見られ ($F(1,30)=2.93, p<.10$)、下位検定の結果、知覚項目において強迫傾向高群は強迫傾向低群よりもフォールスアラーム率が多い傾向が認められた ($F(1,30)=3.16, p<.10$)。また強迫傾向高群は想像項目より知覚項目でフォールスアラーム率が多い傾向が認められた ($F(1,30)=10.99, p<.005$)。ミス率において、確認強迫傾向の主効果 ($F(1,30)=1.51, ns$)、および交互作用 ($F(1,30)=1.88, ns$) は認められなかった。ポジティブ語では、フォールスアラーム率において確認強迫傾向の影響が見られた。強迫傾向高群は低群より、新規項目に対して「見た」と誤って判断することが多かった。

確信度

正再認率における確信度の値を Figure 5 に示す。値が高いほど判断に対する自信が高いことを示している。Perception は知覚項目における確信度を、Image は想像項目における確信度を示している。知覚項目は想像項目より確信度が全体的に低く、また各項目において中性語、ポジティブ語、ネガティブ語の順で確信度は低くなっている。分散分析を行なった結果、確認強迫傾向の主効果 ($F(1,30)=1.03, ns$)、および確認強迫傾向と項目の交互作用 ($F(1,30)=.13, ns$)、確認強迫傾向と感情価の交互作用 ($F(2,60)=1.84, ns$) は認められなかった。強迫傾向高群と低群において、確信度に差は認められなかった。

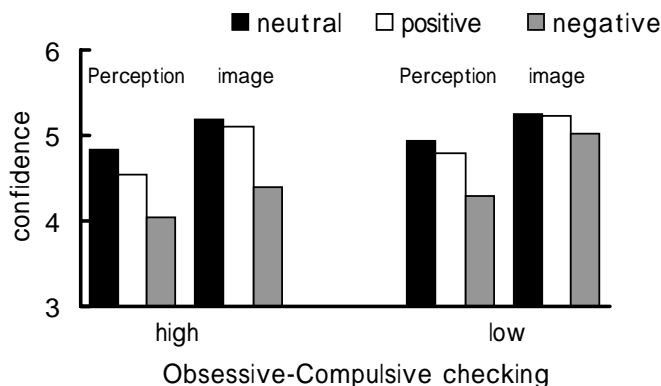


Figure 5 Confidences for memorizing each group, item, and response

【考察】

本研究では、確認強迫傾向高群と低群におけるリアリティモニタリングの違いについて、中性語、ポジティブ語、ネガティブ語といった感情語を用いた偶発学習課題による検討を行なった。実験の結果、中性語においては、確認強迫傾向高群と低群でフォールスアラームにおいて差が認められ、仮説1は一部支持された。確認強迫傾向高群と低群でネガティブ語の判断成績に差は認められず、このことは仮説2を支持しない結果であった。また確信度では、確認強迫傾向高群と低群で差が認められず仮説3は支持されなかった。

リアリティモニタリングの混乱について

本研究では確認強迫者のリアリティモニタリングについて、感情価の影響のない中性語を用いて検討した。中性語のフォールスアラームにおいて、確認強迫傾向高群は新規項目に対して「考えた」と判断するより「見た」と判断することが多く、知覚項目に対する判断が不正確になっていた。このことから、確認強迫傾向高群は自分が行なったことに対する記憶が曖昧になっているために、見ていないものに対して「見た」と判断していた可能性が考えられる。先行研究においてリアリティモニタリングの混乱は認められなかったが(McNally & Kohlbeck, 1993; Constans et al., 1995)、本研究では中性語においてフォールスアラームでリアリティモニタリングの混乱が一部で認められたことになる。中性語において判断が曖昧になっていたことで、確認強迫者では健常者よりリアリティモニタリングの混乱が起りやすい可能性が示唆された。このことから、確認強迫者が確認を行ってしまう原因の1つとしてリアリティモニタリングの混乱がある可能性が示唆されたといえよう。

本研究において、フォールスアラーム以外ではリアリティモニタリングの混乱が見られなかった。この原因としては挿入課題の時間が短かったことが考えられる。本研究では挿入課題の時間を20分としたが、中性語では正再認率が70～85%と高くなっており、挿入課題として十分な時間ではなかった可能性が考えられる。そのため、挿入課題の時間により判断成績に違いが見られるかについて検討した上で実験を行なう必要があると考えられる。

リアリティモニタリングに対するネガティブ語の影響

確認強迫傾向高群と低群において、ネガティブ語が判断成績に及ぼす影響に違いは認められなかった。先行研究では、不安を喚起するような条件で判断の成績が良かったことから、本研究では異なる結果となった。Constans et al.(1995)は、不安を喚起する動作で判断成績が良くなっていたことについて、不安に思うことでその動作について個人的責任性が高まることにより、動作を失敗しないようにしようと動機づけられ、動作をより意識して行なおうとするためによく覚えていたのではないかと考えている。個人的責任性とは、物事が悪い方向に進んだときに、それが自分の失敗であるとみなされる見込みである(Salkovskis, 1985)。実際に動作を行なってもらった場合と、本実験で用いたようなネガティブ語を見る場合とでは実験参加者が感じる個人的責任性に差があった可能性が考えられる。また、Constans et al.(1995)が用いた不安を喚起する動作は「ろうそくを消す」、「ドアを閉める」といった動作であった。これらの動作に対して確認強迫者は、健常者より有意に不安を感じていた。こういった動作は、確認強迫者がよく確認を行なう動作であるため、個人的責任性が高まりやすい動作であると考えられる。本実験で用いたネガティブ語(さつじん、きょうあく)のような不安を喚起する刺激では確認強迫傾向高群の感じる個人的責任性が高くなっていなかった可能性が考えられる。

以上のことから本研究では個人的責任性が低いことで判断成績が低くなっていた可能性が考えられるが、本実験では、個人が感じる責任性を測定していないため、個人的責任性が判断成績に及ぼす影響についてはさらに検討する必要があると考えられる。

リアリティモニタリングに対するポジティブ語の影響

ポジティブ語において、フォールスアラームで確認強迫傾向高群への影響が見られ、高群では低群より新規項目に対して「見た」と判断することが多くなっていた。ポジティブ語において確認強迫傾向高群で判断成績が悪くなった原因として、ポジティブ語によって引き起こされる情動の強さによる問題が考えられる。今回用いたポジティブ語は、「ゆうしょう」、「こうふく」といったものであり、ネガティブ語の「さつじん」、「ごうだつ」といった単語より引き起こされる情動が強くなかった可能性がある。リアリティモニタリングを行なう際に、判断の手がかりの一つとして、刺激の情動が用いられるという(金城, 2001)。そのため、引き起こされる情動が弱いことで判断の手がかりが曖昧になり、誤った判断が多くなっていた可能性が考えられる。本研究では、単語から引き起こされる情動の強さについての検討は行なっていなかった。感情価の統制だけでなく、それぞれの語から引き起こされる情動の強さについても予備調査を行なうことや、実験参加者に情動の強さを評価させ、情動が強いと判断された刺激を用いるなどして情動の強さを統制する必要があると考えられる。

確信度について

本研究において、確認強迫傾向高群と低群の確信度に差は認められなかった。この原因として実験参加者のスクリーニングにおける問題と、刺激として単語を用いたことの問題が考えられる。強迫性障害と診断された確認強迫者において、自分の行動の記憶に対する自信の低下や、想像したことと行動したことの識別(つまりリアリティモニタリング)に対する自信の低下が認められているが(McNally & Kohlbeck, 1993; Constans et al., 1995; Hermans, Martens, Cort, Pieters & Eelen., 2003)、本研究の確認強迫傾向高群は、確認強迫傾向は高いものの日常生活を送ることのできる健常者であるため記憶に対する自信が強迫性障害者ほど低くなかった可能性が考えられる。

今回の実験では、単語を刺激とした単語記憶課題を用いたが、先行研究では実際に動作を行なう動

作記憶課題を用いていた(McNally & Kohlbeck, 1993; Constans et al., 1995; Hermans et al., 2003) . 確認強迫者は自分の行動の記憶に対する自信が低いことから(Hermans et al., 2003) , 実際に動作を行なう課題に比べ , 単語を見る課題では自信の低下が認められなかった可能性が考えられる .

今後の課題

先行研究において , 確認強迫者ではリアリティモニタリングの混乱は見られないとされてきたが , 本研究の結果から確認強迫者においてリアリティモニタリングが混乱している可能性が示唆された . しかし確信度の低下が認められなかったことから , 本実験の実験参加者は確認強迫者とは異なっていた可能性が考えられる . 今後は強迫性障害者を実験参加者として , 実際に動作を行なわせる課題を用いて本研究のような課題や刺激を用いた実験を行なうことで , 確認強迫者におけるリアリティモニタリングの混乱についてさらに検討する必要があると考えられる .

【引用文献】

- Cohen, G. 1989 *Memory in the real world.*:Lawrence Erlbaum Associates.
 (川口 潤・浮田 潤・井上 毅・清水寛之・山 祐嗣(訳) 1992 日常記憶の心理学 サイエンス社)
- Constans, J.I., For, E.D., Franklin, M.E., & Mathews, A. 1995 Memory for actual and imagined events in oc checkers. *Behavior Reseach and Therapy*, **33**,665-671.
- deSilva, D.P. & Rachman, S. 貝谷久宣(訳) 2002 強迫性障害 ライフ・サイエンス
 (Silva, D.P. & Rachman, S. 1998 *The Facts : Obsessive Compulsive Disorder* : Oxford University Press)
- Hermans, D., Martens, K., Cort, K.D., Pieters, G., & Eelen, P. 2003 Reality monitoring and metacognitive beliefs related to cognitive confidence in obsessive-compulsive disorder. *Behavior Reseach and Therapy*, **41**,383-401.
- Hoffman, H.G. 1997 Role of Memory strength in reality monitoring decisions: evidence from source attribution bias. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, **23**, 371-383.
- 井出正明・細羽竜也・西村良二・生和秀敏 1995 強迫傾向尺度作成の試み 広島大学総合科学部紀要 理系編 21, 71-182.
- Johnson, M.K., Nolde, S.F., & De Leonardis, D.M. 1996 Emotional focus and source monitoring. *Journal of Memory and Language*, **35**,135-156
- Johnson, M. K., Raye, C. L., Foley, H. J. & Foley, M. A. 1981 Cognitive operations and decision bias in reality monitoring. *American Journal of Psychology*, **94**, 37-64.
- 金城 光 2001 ソース・モニタリング課題を中心としたソース・メモリ研究の動向と展望 心理学研究 72,134-145.
- McNally, R.J., & Kohlbeck, P.A. 1993 Reality monitoring in obsessive-compulsive disorder. *Behavior Reseach and Therapy*, **31**,249-253.
- 田辺 裕 2000 私が引きこもった理由 ブックマン社 Pp. 47-58.
- Salkovskis, P. M. 1985 Obsessive-compulsive problems: a cognitive-behavioural analysis. *Behavior Reseach and Therapy*, **23**,571-583
- 清水秀美・今栄国晴 1981 STATE-TRAIT-ANXIETY-INVENTORY の日本語版(大学生用)の作成

教育心理学研究, 29, 62-67.

杉浦義典 2002 サルコフスキスはどのような臨床研究をしているか 丹野義彦(編) 認知行動療法の臨床ワークショップ

サルコフスキスとバーチウッドの面接技法 金子書房 Pp. 13-39.